

周辺地域の曳山狂言（曳山子ども歌舞伎）

橋本章

① 概要―曳山祭礼の分布と曳山狂言の展開―

(1) 山車文化の展開と曳山狂言の諸相

山車あるいは屋台などと呼ばれる巨大な曳行物をともなう祭礼行列は、いち早く爛熟期を迎えた京都の祇園祭における山鉾の巡行をその嚆矢として、日本の各地にその分布がみられる。平成五年（一九九三）に長浜市教育委員会がおこなった山車祭りに関するアンケート調査『長浜曳山祭総合調査報告書』平成八年 長浜市教育委員会発行）では、何らかのかたちで曳山が出る（あるいは近年まで出た）祭礼は全国で一三二二件の数に上る。

山車が巡行する祭礼がこれほど多く登場した背景には、近世期における流通経済の発展によって、各地方都市における経済力が曳山を建造などして所有し得るほどに向上した事と、曳山の出る祭礼を抱える都市文化が成熟して、曳山の舞台上などで繰り広げられる歌舞音曲を支えるに耐え得る条件が整えられた事などが、その要因として考えられている。

各曳山における風流の意匠としては、京都の祇園祭に代表される幕類などの豪華な懸装品による装飾や、曳山の巡行を囃す祇園囃子などのお囃子、あるいは飛騨高山の高山祭にみられるような、緻密な設計を具現化させたからくりによるものなど、様々なものがある。そのなかでも、曳山の構造に舞台をもち、近世期に隆盛した歌舞伎を舞台上に搭載して、これを披露することを趣向とする曳山狂言の様式は、長浜

曳山祭にみられるごとく、演技者を子どもにすることで独特の効果をねらった子ども歌舞伎を基軸として、いくつかの曳山祭礼にその事例を見る事ができる。

ひとくちに曳山狂言といっても、これを実現するためには様々な工夫が必要となる。まず狂言の役者を育成するシステムがそれであり、また狂言の演目を支える三味線と太夫の担い手の確保も必要条件となる。もちろん、狂言を披露する舞台をはじめ、三味線や太夫が技芸をおこなう場所や役者が控えたり衣装を転換したりするなど、諸条件をこなす楽屋も当然必要となるなど、曳山自体の構造的条件もまた、満たされなければならない。その意味において、曳山狂言を現有する祭礼には、希少な価値付けがなされるものと思われる。

(2) 諸国の曳山狂言の状況

先に述べた平成五年の長浜市教育委員会による山車祭りに関するアンケート調査では、曳山の意匠として狂言を搭載（もしくは山車の周辺で狂言を披露）すると回答を寄せた事例は三七件である。アンケートの性格上、狂言がどの程度のものであるかは判断が難しく、また狂言や地狂言とは回答しないまでも、じつは狂言に近似する芸能が催されている可能性なども一部には考慮されるため、あくまでも三七という件数は概数的な範疇を出ないが、山車の登場する祭礼の総数一三二二に占める曳山狂言を有する祭礼の割合としては、ひとつ目安となるものと思われる。

ただし、同アンケートに記載された曳山狂言をその意匠とする祭礼のうち、平成五年の時点で現役でこれを執行しているとする祭礼は、わずかに一五件とさらに減少をみせる。そして、本調査年において同デー

タにおける一五件を追跡したところ、現状で曳山狂言を執行していたのはさらに減って一二件となっている。

その内訳は、福島県田島町の田島祇園祭、埼玉県秩父市の秩父祭、石川県小松市のお旅まつり、福井県美浜町早瀬の日吉神社祭礼、岐阜県揖斐川町の揖斐祭り、同じく岐阜県垂井町垂井の垂井曳山祭り（山は車偏に山）、そして岐阜県古川町の古川祭、長浜曳山祭、米原曳山祭、京都府宮津市の宮津祭、兵庫県浜坂町の川下祭り、香川県白鳥町白鳥神社だんじり歌舞伎、の各件である。これに、アンケート調査の網の目から漏れたものの、現状で曳山狂言を執行する富山県砺波市の出町子供狂言曳山祭を加えた一三件が、現状における曳山での意匠として狂言を有する祭礼の概数である。

アンケートの集計結果から、曳山の意匠として狂言を充当させた祭礼は、諸国の曳山祭礼中わずかパーセント程にすぎないことがみてとれよう。また、アンケート実施時点で、既に曳山狂言が過去のものとなったと回答した地域が二二件もあり、とくに昭和時代の中後期となって、地方都市の経済的疲弊や労働人口の減少などにもなう曳山狂言を支える層の減退が、その傾向に拍車をかけている事は否めない。

(3) 曳山狂言の維持に関して

曳山狂言の維持に関する方途としては、舞台などを有する山車本体の保存管理及び修復はもちろんのことであるが、これにもまして必須となるのは、役者と振付・三味線・太夫の三役の確保である。これに関して、平成二二年に第二〇回全国地芝居サミットIN長浜実行委員会が実施した「地芝居アンケート調査」の集計結果に、関連するデータが挙げられているので紹介する。

同アンケート調査において返答のあった二七団体のうち、曳山狂言を有するものは、田島祇園祭屋台歌舞伎保存会、秩父歌舞伎正和会、砺波狂言曳山振興会、小松曳山人町連絡協議会、垂井曳山保存会（山は車偏に山）、長浜曳山文化協会、米原曳山祭保存会の七団体である。同アンケートでは、歌舞伎執行に欠かせない振付・三味線・太夫の三役について、その芸能者の派遣関係などについてがまとめられているが、それによると、まず振付に関しては、小松曳山人町連絡協議会が砺波狂言曳山振興会に対して振付を派遣し、長浜曳山文化協会が米原曳山祭保存会に対して振付を派遣している。また、この米原曳山祭保存会と垂井曳山保存会に対しては、曳山での披露はない東美濃歌舞伎中津川保存会からの振付派遣の実績がある。

つぎに太夫については、長浜曳山文化協会から垂井曳山保存会と米原曳山祭保存会に対してその派遣がおこなわれている。三味線についても同様で、長浜曳山祭の芸能者が垂井と米原に関与することがうかがわれる。

② 曳山の構造から見る曳山狂言の展開

(1) 湖北地域における舞台を持つ曳山の展開

曳山に搭載する趣向として歌舞伎などの芸能を選択した祭礼においては、当然ながらその芸能の披露を実現するための装置の充実が命題となる。それが体現されたものが、長浜曳山祭にも登場する正面に舞台を持つ曳山である。芸屋台とも呼ばれる同形状の曳山は、諸国にいくつかその分布を認める事ができるが、長浜及びその周辺地域では、長浜で創建された芸屋台型の曳山と根源を同じくする設計思想のもと建

造された曳山が数台分布する。

長浜の曳山設計に関しては、藤岡家の一門がこれに深く関与している点の特徴となっている。藤岡家は長浜伊部町に住んだ大工の家柄で、初代より甚兵衛を名乗って長浜八幡宮の神輿などを手掛け、また一方で後世に浜仏壇と称される仏壇製作の家としても著名であった。藤岡家の大工は三代目の頃から「和泉」を名乗り、四代目の和泉長好が青海山を建造し、五代目と泉一富は翁山・諫鼓山・狸丸を建造、六代目と泉利盈が壽山を建造している。

藤岡和泉家は六代で途絶えたとされるが、その後は分家の藤岡重兵衛家が大工の職責を受け継ぎ、長浜の曳山の形状において決定的な変化をもたらした亭（ちん）の搭載に関しては、この重兵衛家が多くこれを手掛けている。藤岡家に残る曳山の建地割図などの図面類は、江戸時代に藤岡家が長浜型の曳山の建造を得意としていた事を物語り、曳山の上で歌舞伎などの諸芸を披露することを念頭に置いた造形美を、いちはやく大成させたのであろう。

藤岡家の創造した、狂言を見せる曳山、という設計理念は、その後各方面にも波及し、長浜の曳山を購入したり、あるいは藤岡家の大工もしくはその弟子筋の大工に新たに建造させるなどして広まっていった。

(2)長浜曳山祭の山車の構造と藤岡家

長浜の曳山祭は、その昔、羽柴秀吉が長浜城主であった頃、子息の誕生を祝って振舞った祝儀をもとに、町衆が曳山をこしらえて長濱八幡宮に曳行したことが始まりであるといひ伝えられている。

長浜の曳山祭には、前面に舞台をもった四輪の一二基の曳山と、これとはやや形状を異にする三輪の長刀山とがあり、一二基ある曳山の舞

台の上では、愛らしい子どもによる狂言が演じられる。祭りでは、毎年四基ずつの曳山が交代で出場して、長濱八幡宮の境内や御旅所などで、それぞれに狂言を披露している。

長浜に伝存する各曳山の建造者は、部材への墨書や関連資料などから、そのほとんどが長浜の伊部町（現・長浜市元浜町）に住んだ大工の藤岡家の手によるものであることが判っている。正面に舞台を配し、後部に楽屋、そして上部に亭と呼ばれる独特の構造を持つ長浜の曳山は、藤岡家によってその設計理念が確立したといっても過言ではない。湖北に点在する曳山のそれぞれについても、前面に舞台をもつ藤岡家が考案したタイプのもものが大半であることから、湖北においてその影響力は計り知れない。

そして、長浜曳山祭の魅力をさらに際立たせているのは、祭りに付随する様々な民俗である。曳山の舞台で繰り広げられる狂言はもちろんのこと、裸参りや御幣迎え、曳山で奏でられるシャギリの音色に、勇壮な武者姿の太刀渡り、狂言の役者たちによる朝渡りや夕渡り、そして曳山を題材とした様々な美術工芸品などは、湖北を代表する文化として、歴史的にも大きな意義をもってきたものといえよう。

(3)米原曳山祭

米原の曳山祭は、かつて宿場町として栄えた米原の町場に伝来し、町の山すそにある湯谷神社の秋の大祭にあたる一〇月一〇日を中心に催されている。祭りに曳山が登場した起源は、明和七年（一七七〇）頃ともいわれているが、江戸時代後期の創始ということ以外詳細は不明である。祭りの呼び物は曳山の舞台で繰り広げられる子どもによる狂言で、宵宮から後宴までの三日間、町内を曳山が巡行して要所で子ど

もによる狂言が披露される。

米原に三基ある曳山も、長浜と同様に大工藤岡家によって造られたものである。例えば北町組の旭山には、その棟木に「奉成就八幡宮 御山一輛、宝曆拾庚九月吉辰 大工藤岡重兵衛作之 神戸町」の墨書があり、元は宝暦一〇年（一七六〇）に長浜神戸町の曳山（孔雀山）として製作されたものであることが判明している。そして、中町組の松翁山についても、江戸時代後期に長浜の翁山を模して藤岡家が製作したものと伝えられているなど、各曳山の来歴に長浜とのかかわりの深さがうかがえる。また、南町組の寿山については、舞台屋根裏に「明治四年 米原寿山 長浜伊部町藤岡」と墨書のある木札が打ちつけてあることから、藤岡家の大工によって明治四年（一八七二）に製作されたことが知れる。

曳山本体以外にも、演奏されるシャギリの奏者が、近在の村々から長浜と米原の両方に出勤するなど、芸能の面でも湖北を通観する広域な交流の痕跡が見られる。

(4) 宮司の颯々館

長浜市宮司町（旧長浜市）の旧宮川村（宮司東町）に伝わる曳山「颯々館」は、毎年五月に催される日枝神社の春祭りで、飾り付けが施されて山蔵から曳き出され、祭礼の渡御行列を見送る。長浜曳山祭の曳山とほぼ同じ大きさのもので構造も似通っているが、亭は搭載されていない。建造年は享和二年（一八〇二）で、その製作者は藤岡和泉家第六代の大工甚兵衛利盈である。また、見送幕の「雲龍図」は、文政一二年（一八二九）に宮川藩の第六代藩主堀田正民が描いたものである。また楽屋襖は岸駒が手掛けるなど、随所に豪華なしつらえが施されている。

この颯々館では、長浜同様に子どもによる狂言が披露されていたことが記録に残されている。宮司に残る狂言台本の最古のものには天明八年（一七八八）の年記が見られ、これが確かであるとすれば、颯々館の建造以前にも宮川村で地狂言が披露された可能性がうかがわれる。そのほか、長浜町人が記した「累年日記」の文化二年（一八〇五）四月七日条では「宮川祭曳山再建、当年白木にて大人俄狂言する」との記載があるなど、颯々館での曳山狂言の様相がうかがわれる。

宮司町での曳山狂言は、昭和二十七年（一九五二）に「鎌倉三代記 三浦別れの段」が六歳から一一歳までの男児によって披露されたのを最後におこなわれなくなっている。

(5) 米原市朝妻筑摩の鍋冠祭の山車

毎年五月三日に朝妻筑摩の筑摩神社の祭礼として催される鍋冠祭は、七歳前後のあどけない少女が張子でできた鍋釜をかぶり、そろいの狩衣姿で神社まで渡御することで知られているが、この祭礼にも曳山が登場する。形状は長浜のそれと同様に前面に舞台を持つものだが、長浜のものよりも全体的にやや小ぶりで、曳山の後部の構造はかなり異なる。

また鍋冠祭には、この曳山とは別に、名工宮部太兵衛によって造られた太鼓山三基も登場する。なお、江戸時代後期の筑摩の祭礼を描いた「筑摩祭礼行烈図」には、曳山や太鼓台の姿は描かれておらず、これらがいずれも後の時代に渡御などに加わったことをうかがわせる。

(6) 長浜市五村（旧虎姫町）の常盤山

五村の日前神社境内にある山蔵に保管されている曳山「常盤山」は、長浜曳山祭に登場する曳山と同じく前方に舞台を配した構造を持つ。

その製作者は長浜の曳山を手掛けた大工藤岡重兵衛安道の弟子高橋仙助で、文政五年（一八二二）八月に、五村の庄屋大村彦右衛門が、子どもが生まれた祝いに寄進したものと伝えられている。明治の初期までは日前神社の春と秋の祭礼に曳行され、その舞台で子どもによる狂言が奉納されていたというが、近年では八月の灯明祭に虫干しを兼ねて山蔵から出す程度となっている。

(7)長浜市高月町雨森（旧高月町）の高砂山

かつて高月町雨森にあった曳山「高砂山」は、前面に舞台をしつらえ、後方に楽屋を備えた長浜と同等の構造をもつ曳山で、文政九年（一八二六）に長浜の曳山を手掛けた藤岡和泉重兵衛安則によってつくられた。毎年九月一三日の天川命神社の祭礼にはこの曳山が曳き出され、舞台上で子どもによる狂言が奉納されていたが、次第に祭礼の維持が困難となつていったため、昭和四九年（一九七四）に大阪府吹田市の国立民族学博物館に売却された。現在同博物館の常設展示室にて一般に公開されている。

③ 長浜周辺地域における山車祭りの狂言の諸相

(1)米原曳山祭

米原曳山祭では、毎年一〇月一〇日前後の三日間、湯谷神社から旧街道沿いの米原町内一帯において、曳山の巡行と狂言の披露が執り行われる。米原には旭山（北町）・松翁山（中町）・寿山（南町）の三基の曳山があり、それぞれの曳山が三年に一度などの周期で狂言を披露する。

米原曳山祭の創始は江戸時代後期といい、伝承では、明和七年

（一七七〇）に中山道米原宿の人びとが長浜曳山祭の様相を真似て曳山を建造し祭礼をはじめたのだとする。披露される狂言の状況は長浜曳山祭のそれと酷似しており、小学六年生までの男児を役者とし、振付・太夫・三味線の三役がその芸能において重きをなす。殊に狂言の演出などで重要な役割を果たす振付については、長浜にも参勤する振付が米原でも振付をおこなうなど芸能の様相にも近しいものがある。また三味線や太夫についても、長浜からの参勤が近年では目立つ。

そして、曳山の巡行を囃す祭囃子は、長浜同様シャギリと呼ばれ、かつては米原周辺の農村などから演奏者を依頼していたが、その後一時衰退し、近年では地元で保存会が結成され、狂言の披露前などに演奏している。

(2)垂井曳山祭りの狂言

岐阜県不破郡垂井町垂井の曳山祭りは、毎年五月二日の試楽、三日の本楽、そして四日の後宴の三日間、中山道の宿場町であった旧垂井宿の町場一帯で催される。垂井には鳳凰山（東町）・攀鱗閣（西町）・紫雲閣（中町）の三基の曳山があり、八重垣神社をはじめ各所で子どもによる狂言が披露される。

垂井曳山祭りは、その由来を南北朝時代にまでさかのぼるのだとされ、北朝の後光厳天皇が文和二年（一三五三）に南朝から逃れて垂井に來られた際、里人が帝をお慰めするために花車を造ってご覧に入れたのがその始まりと伝える。その後文政年間（一八一八―二九）に子供の狂言を披露するよう山車が改造され、現在の祭礼へと連なる曳山歌舞伎の文化が創造されたのだという。この曳山の改修に関して、長浜とのかかわりでは、長浜の大工藤岡和泉が明治三年（一八七〇）に紫雲閣

の改造に携わったことが知られている。

垂井曳山祭りで披露される各曳山の歌舞伎については、神事係青年がこれに携わる。行事は二月一日の初集会に始まり、二月には役者を務める芸児の選出と芸題決めがおこなわれ、四月中旬になると、振付・三味線・太夫の三役揃いや、稽古はじめがある。三役の芸者たちはこの頃から垂井に泊まり込んで演目の完成にむけて稽古を重ねる。長浜曳山祭の関係者の中からも、毎年何名かが三味線などの三役として招聘されており、狂言をめぐって近年では密接な関係性が続いている。

(3)小松の御旅祭

石川県小松市のお旅まつりは、毎年五月の中旬に小松市の旧小松城城下町の町場で執りおこなわれている。曳山は龍助町・西町・大文字町・寺町・八日市町・京町・中町・材木町のそれぞれに一基ずつの計八基あり、小松ではこれを「曳山八基」と称し、平成二年からは全ての曳山が出場して「曳山八基揃え」が断続的におこなわれている。

小松の曳山祭は、江戸時代に小松城下の旦那衆が長浜曳山祭を真似て明和三年（一七六六）に始めたものといわれ、安永五年（一七七六）には、松任町が長浜の古い曳山を買いとって大幅な改造を施して、小松独自の曳山を建造し、以後各町がこれを模した曳山を暫時建設して、都合一〇基の曳山が揃っていったのだという。その後二度にわたる昭和の大火によって松任町と東町の二基の曳山が焼失し、現在は八基となっている。

小松のお旅まつりでは、曳山の上で子どもによる狂言が披露されることと呼び物となっていて、昭和二十六年（一九五一）からは、毎年の輪番制で八基中二基の曳山で狂言が催されている。お旅まつりでの狂言

の特徴は、役者がほぼ皆少女であるということであろう。

地元での語りによれば、元来、お旅まつりでも狂言の役者は長浜同様男児が務めることとなっていたのだが、日露戦争のあと、男児が女形を務める狂言は日本男児の気風にそぐわないという声が強まり、明治大正期には金沢の芸妓見習いの少女が狂言の役者を務めたのだそう、その後、昭和の混乱期を経て、現在のような八歳から一二歳までの女児による少女歌舞伎の様相となったのだという。

狂言に関する小松のお旅まつりにおける注視すべき点は、長浜でも出勤した振付がこの小松にも参勤しているという点で、具体的には平成四年から平成二二年まで長浜曳山祭の振付をそれぞれの山組で務めた市川団四郎氏が、平成二一年には小松の龍助町で「銘刀石切仏御前」、同二二年には寺町で「梅川・忠兵衛 浪速の恋の物語 封印切の場」、そして平成二三年には、市川団四郎氏が平成二二年に長浜の萬歳樓で振付を担った演目である「男の花道」を、小松の京町において振付している。

曳山歌舞伎の芸能に関して、各地の祭礼を渡り歩いて演出を施してゆく振付の存在は、その振付に付帯する衣装屋や鬘師や化粧師などという、歌舞伎芸能を下支えするために渡り歩く職人たちの存在もあいまって、今後注視すべき芸能者であろうと思われる。

行事名もしくは 曳山の名称	所在地 (旧所在地)	祭礼日	台数	芸能・意匠	現況
丹生茶わん祭	長浜市上丹生 (余呉町)	4～5月頃 (3～5年毎に開催)	3基	陶器類と人形の山飾り・囃子	解体して保管
高砂山	長浜市高月町雨森 (旧高月町)	(明治41年頃まで催行)	1基	(狂言・シャギリ等)	国立民族学博物館蔵
(曳山)	長浜市高月町井ノ口 (旧高月町)	(大正末頃まで催行)	2基	不明	売却
常磐山	長浜市五村 (虎姫町)	8月の灯明祭に山飾りをする	1基	(子供芝居)	山蔵にそのまま保管
春祭り・颯々館	長浜市宮司町 (旧長浜市)	毎年5月3日	1基	(子ども歌舞伎)	山蔵にそのまま保管
長浜曳山祭	長浜市 (旧長浜町山組)	毎年4月13～15日	12(+1)基	子ども歌舞伎・シャギリ	山蔵にそのまま保管
鍋冠祭	米原市朝妻筑摩 (旧米原町)	毎年5月3日	1基	なし	山蔵にそのまま保管
米原祭	米原市米原 (旧米原町)	毎年10月10日	3基	子ども歌舞伎	山蔵にそのまま保管
(曳山)	米原市醒ヶ井 (旧米原町)	(昭和25年頃まで催行)	3基	(子ども歌舞伎)	売却

滋賀県湖北地域曳山の出る祭礼一覧

山組	組名	構成町	①本体建造年	②亭建造年	大工名
長刀山	長刀組 (小舟町組)	小舟町・舟片原町・中瀬町	伝・元禄12年 (1699)		伝・藤岡甚兵衛
高砂山	宮町組	宮町・片町・金屋新町・金屋町・北裏町	延享2年 (1745)	文化13年 (1816)	②藤岡和泉藤原安則
諫鼓山	御堂前組	東御堂前町・西御堂前町・十軒町	安永3年 (1774)	安永3年 (1774) 再建 文化14年 (1817)	①藤岡和泉藤原一富 ②田中嘉平治博君 (棟木墨書)
翁山	伊部町組	南伊部町・北伊部町・三津屋町・北出町	明和2年 (1765)	文化13年 (1816)	①藤岡和泉藤原一富 ②十兵衛
青海山	北町組	東北町・中北町・袋町・知善院町・郡上片原町・郡上町・鍛冶屋町	宝暦5年 (1755)	文化2年 (1805)	①藤岡和泉長好 ②藤岡重兵衛安道
鳳凰山	魚屋町組 (祝町組)	東魚屋町・中魚屋町・西魚屋町	文政12年 (1829)	文政12年 (1829)	
常磐山	呉服町組	上呉服町・中呉服町・下呉服町・西北町・北片原町・中片原町・南片原町	明和7年 (1770)	文政元年 (1818)	
壽山	大手町組	大手町・大谷市場町	天明2年 (1782)		①藤岡和泉藤原利盈
春日山	本町組	東本町・西本町・横町			
孔雀山	神戸町組	神戸町		文化12年 (1815)	
萬歳樓	瀬田町組	瀬田町・横浜町・箕浦町・大安寺町・紺屋町・八幡町	享和2年 (1802)	享和2年 (1802)	①藤岡重兵衛安道・安則 ②藤岡重兵衛安道・安則
月宮殿	田町組	上田町・中田町・下田町・南新町	天明5年 (1785)	嘉永3年 (1850)	①岡田惣左衛門重貞 ②藤岡重兵衛光隆
猩々丸	舟町組	上舟町・下舟町・稲荷町・十一町	安永3年 (1774)		①藤岡和泉藤原一富

長浜曳山祭曳山一覧